

11<sup>th</sup> world congress on pain  
(International association for study of pain)  
国際疼痛会議に参加して

金銅 英二

大学院顎口腔機能制御学講座

去る8月21日から26日まで開催された国際疼痛会議 IASP 2005, 更に27日・28日は口腔顔面痛国際会議に参加した。本会議は二年毎に開催されており, 今回はオーストラリアシドニーが開催地であった。世界各国から7000人以上の研究者が集まり, 臨床研究から基礎研究まで様々な分野(1822演題)からデータが示され, 活発なディスカッションや情報交換が展開された。

特に Basic Science の分野では, カプサイシン受容体や  $\text{Na}^+$  や  $\text{Ca}^{2+}$  チャンネル, など細胞膜から PKC, PKA, MAPK など細胞内情報伝達系に至る疼痛関連分子の詳細な機能解析研究が飛躍的に進んでいる。同時に各種新薬の開発, 臨床応用も世界各国で積極的に取り組まれており, その状況を把握することが出来た。

朝8時半から夜8時まで活発なディスカッションが連日繰り広げられた。また, 新薬の紹介を兼

ねた製薬会社がスポンサーのディナーシンポジウムも展開されて, 起床から就寝まで「Pain」漬けの有意義な日々であった。また, 全世界の痛み研究者が使用している CCI: Chronic Constriction Injury モデル動物の考案者である Gary J. Bennet 教授 (McGill 大学) や痛み性の性差を研究している David. A. Bereiter 教授 (Brown 大学) など海外で痛み研究を行っている著明な研究者に我々のデータに対するアドバイスや指摘を受ける光栄にも恵まれ, 我々にとって新たな課題も発見できる機会となった。

会期中, 日本人としては二番目となる特別講演が兵庫医科大学野口光一教授 (松本歯科大学非常勤教授) により行われた。これは, 日本における痛み研究の成果が世界で認められた結果として特筆すべきことであろう。

更に27・28日に開催された口腔顔面痛国際会議



写真1: 会場内の様子 (企業展示ブースの一部)

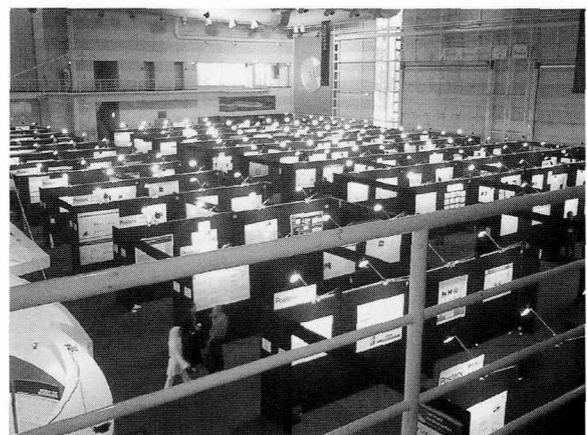


写真2: 会場内の様子 (ポスター会場)

では前述の国際会議と比べて顎関節症などをはじめとする臨床に関連した内容が中心となり，参加者もアジア領域（中国・韓国など）が目立っていた．日本からも歯科麻酔学や歯科補綴学，基礎歯科医学を中心としたメンバーが多数参加していた．

会期中のシドニーは，南半球のため冬であった．早朝の気温は11度前後の肌寒さであるものの，日中は21度前後……丁度夏の軽井沢という感じであろうか？ 連日，快晴が続き快適な日々であった．シドニーの陽射しは強く，コンベンションセンターのある Darling Harbar の公園では，日光浴を楽しむ多くの人々がいた．毎日通うホテルから会議場までの徒歩20分ほどの道のりでは，ビクトリア王朝時代を彷彿させる古い建造物と近代的な建造物が入り混じる美しい光景が楽しめた．



写真3：会場からシドニータワーと中心街高層ビルを望む．手前は Cockle 湾と Pyrmont 橋の一部．この橋の中央部は回転して大型船舶が通過できる．